

女性（30代）禁煙年齢・20代

私の一番の楽しみは、タバコだ。

何をするにも、タバコで始まり、タバコで終わる毎日だ。もし、タバコと何かを選ばなければならないのなら、迷わずタバコを選ぶ。タバコと男なら、タバコだ。

そんな私に好きな人ができた。ところが彼はタバコを吸わない。それどころか、タバコ嫌いだ。何とか、自分の魅力で交渉の末、彼の家のベランダで吸う事は許可された。

でも、彼はキスしなかった。

彼の唯一、イヤな部分だ。

妊娠がわかった帰り道も、車を運転しながら火をつける。赤ちゃんに良くないとわかりながらも、妊娠は今わかったばかりなのだ。もし、病院へ行くのが明日だったら、今ごろ何もためらわずにタバコを吸っていたはずだ。言い訳しながら、大きく煙を吸い込む。それから、赤ちゃんが出来た事実を胸を踊らせ彼の元へ車を飛ばした。

二週間後、彼に逃げられた。

彼は結婚したくなかったらしい。

もしかしたら、タバコを吸っている私とは結婚したくなかったのかもしれない。ひよっとしたら、妊娠しているのに、タバコを吸う女とは結婚したくなかったのかも。

待てよ、タバコと私を天秤にかけて、私を捨てるなら、それほどの愛ではないだろう。

「それなら、それでいいか。」

私はまたも、タバコに火をつけた。

私は一人になった。

妊娠五ヶ月。

お腹はだいぶ目立ってきた。

私は地獄の中にいた。

「タバコ、持っている？」

友達のカレンちゃんがメンソールを一本差し出した。

「あんまり我慢すると、ストレスになるから少しぐらいは平気だって、私の時はお医者さんに言われたよ」

子供が二人いるカレンちゃんはライターに火をつけながら言った。

……ウソだ。

確かに一本吸ったからって、すぐに子どもの指が一本足りないなんて事はないだろうけど、子どもにいいわけがない。

赤ちゃんは私だけを頼りにお腹の中でがんばっているんだ。私もお腹にいる赤ちゃんだけを支えにがんばっている。そう思いながらも、メンソールに物足りなさすら感じる。

ああ、マルボロとかをがつつり吸って、くらくらしたいよお。

編み物を始めることにした。

一日に帽子なら一個、セーターなら二日で一枚、とノルマにして没頭した。

タバコに手が伸びないために、不器用な手でイライラしながらも小さい赤ちゃんの小物を編んでいくうちに、私の心に何かが生まれた。

母性だ。

赤ちゃんのサイズを確認しながら、洋服を編んでいくうちに、私はママになっていったのだ。

気がついたら、封を切ったタバコが何日もそのままになって、しっけていた。ためらいながらも、まだずっしり入っているマルボロライトをゴミ箱の中に捨てた。

もう、地獄の苦しみはなかった。

元気な男の赤ちゃんが生まれた、と同時にいつも近くにおいて世話を焼いてくれる、幼なじみと結婚することにした。

子煩悩な優しい彼だけど、スモーカーだ。

でも彼がベランダでタバコを吸えていたのは、赤ちゃんが生まれて三ヶ月ぐらいの間に過ぎなかった。

生まれたてのふにゃふにゃだった赤ちゃんから逃げていた彼も次第に自信を付け、大きな彼の手は、赤ちゃんの場所になり、もはやタバコの居場所はなくなった。

「タバコ、やめておいて良かったね」

二人の子どもの親になった私達は、庭付き一戸建てのリビングの中にいた。

タバコをやめたおかげで不思議なほど出費がなくなり、頭金もたまり、小さな家を買えた。

海外旅行に行く時も、飛行機の中でヤニ切れに悶えることもなく、幼稚園のママ友達の集まりでも、タバコをコソコソ吸いに行くママを横目に、さわやかなママでいられた。食後の一服ができない、レストラン街で途方に暮れることもない。

そして、私の手はいつでも、この子ども達のためにあいている。

禁煙から得た自由は果てしなかった。